



対話の場、貸本屋「原発文庫」

～第 13 回力あわせる 200 万群馬さよなら原発アクション(2024 年 3 月 10 日 高崎城址公園)～
田村ゆう子

1 月 1 日に能登半島大地震が起き、震度 7 の揺れに襲われた志賀町にある志賀原発は、使用済み核燃料を冷やすためのポンプが一時停止したり、外部電源を受けるための変圧器が損傷したり、2 万リットル以上の油が漏れて外部電源の一部が使用不能になるなどの事故を起こしました。原発が停止して大事故に至らず一安心したものの東日本大震災福島第一原子力発電所(以下フクイチ原発)の事故を思い起こさせるものでした。また、この地震は活断層がいろいろな場所で見つっている日本では、どこでも起こりうることを喚起させるものでした。

500 人を超える参加者

フクイチ原発事故から 13 年が経った今年の集会は、テントが飛ばされるような強風の中、昨年より多い 500 人を超える人々が参加しました。けたたましい音響で集会を妨害する右翼対策とはいえ警官の多さに驚きましたが、やはり能登半島地震に対する不安感からか、最近の集会にはない緊張感があったように私には感じられました。



り能登半島地震に対する不安感からか、最近の集会にはない緊張感があったように私には感じられました。

今までで一番多い貸し出し数

今年はフクイチ原発事故に関するものを中心に 75 冊の本を並べました。その隣に、能登半島地震の説明や被害状況を展示しました。

能登半島地震、ロシアのウクライナ侵攻によるザポリージャ原発の占領や核兵器使用の危機感など、放射能被害が現実味を帯びる中で、参加者の関心が高まっていると思いました。本を仲立ちにして見知らぬ参加者と会話が始まります。能登半島の出身という女性や県外から来た若者もいました。フクイチ原発事故の調査報告や当事者の話、放射線障害についての本など 19 冊の本が貸し出されました。漫画は人気で、開店早々 5 冊全部が貸し出されてしまいました。本と一緒に最新のフクイチ原発の状況の資料を配布しました。



声を挙げ続けていく意義

マスコミは、3 月 11 日が近づくとフクイチ原発事故のことを報道しますが、3 月 11 日が過ぎた途端その報道は極端に減っていきます。

岸田首相は、気候対策に便乗し、原発再稼働、40 年寿命を大幅に超える 60 年稼働、さらには新規原子炉の建設を言い出しました。日本はまだ「原子力事故緊急事態宣言」発令中であり、福島の避難者は公式発表でさえ 26277 人(福島県のまとめ、2024/02/01 現在)もいます。フクイチ原発からは汚染水が出続けており、壊れた原子炉の中に 880 トンあると言われている燃料デブリは未だ 1 グラムも取り出すことができないでいます。

「関心を持ち、監視する人間が減れば、東電も報道も原子力規制も劣化する」と事故直後から東電の記者会見に出続けているおしどりマコさんは書いています(週刊金曜日 2024/03/08 号)。福島では「原発反対」の声を挙げづらくなっているそうです(丹治杉江さんの本集会でのお話)。集会で登壇した方々がさまざまな状況の中で声を上げ続けて来られたことに頭が下がる思いです。

原発文庫で応援します

「原発文庫」は、皆さんが原発や原爆、自然エネルギーなどについて知りたいと思うとき、必要な情報を提供できるようにしたいと思い活動をしています。現在蔵書数は 450 冊を超えました。既に書店には置かれていない本や県内の図書館にはない本もあります。一覧を眺めてみるだけでも、原発の現状や問題点や課題が見えてくるのではないかと思います。フォーラムのホームページから「原発文庫」一覧を一度覗いてみてください。(上の QR コードから見られます)